

初めて好きになった人があなたで、本当に良かった——。

GLASS 1.5

~はじめての恋人~







これは 私の人生において
決して忘れられない大切な思い出となった
ある秋の出来事の話である—



playback GLASS





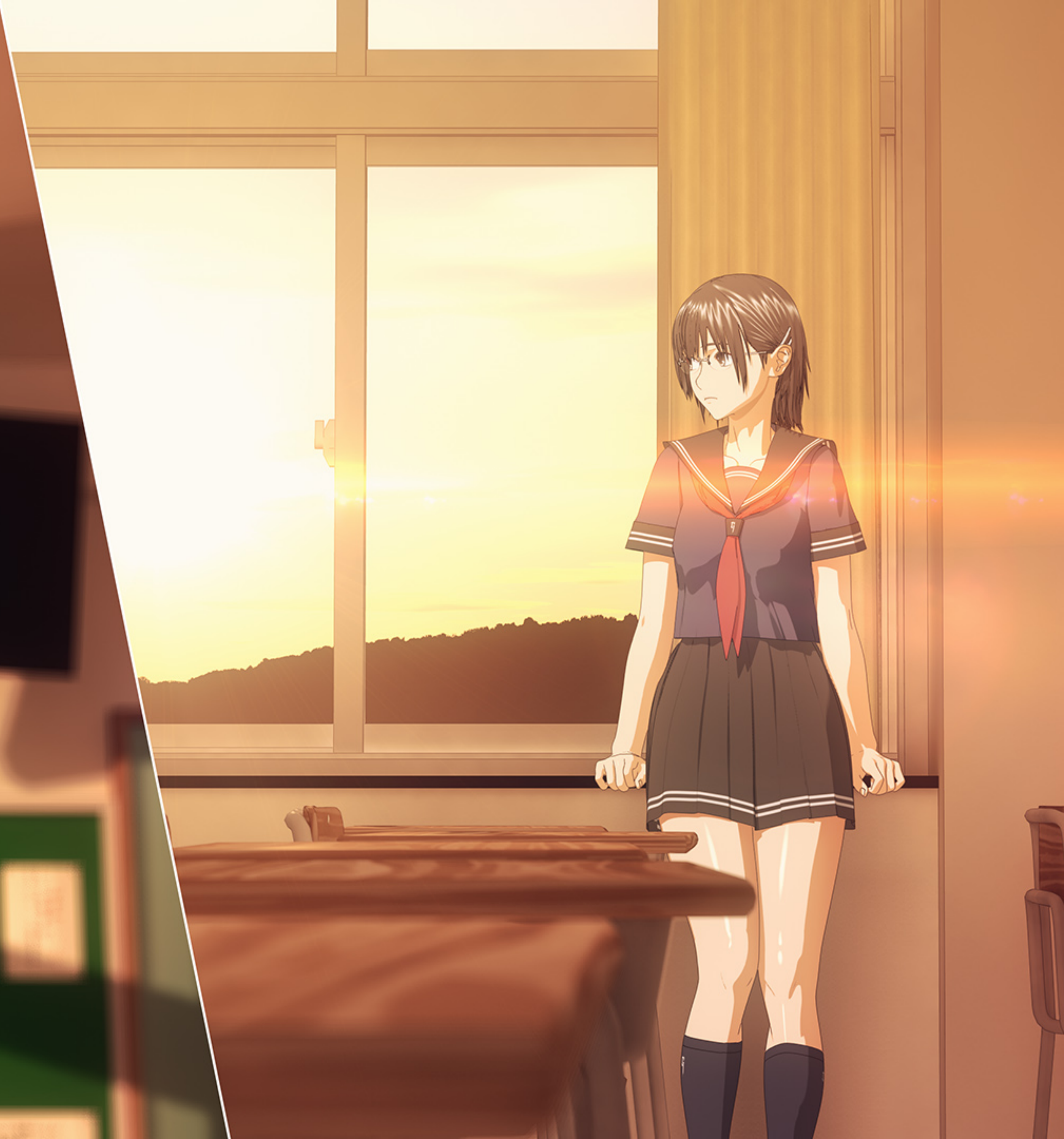
——どうしてこうなってしまったのだろうか？

教室の窓辺に腰掛け沈みゆく夕陽を横目に
私 白川優衣は 今日起こった出来事に思いを巡らせていた

この日私は
何週間も前から準備していたある計画を実行する予定だった

しかしそれは
なんとも些細な理由で失敗に終わってしまった……





その日私は体育の授業を体調が悪いと嘘をつき欠席をした
人生で初めて綴った恋文を

クラスメートの男の子の机に忍ばせるというただそれだけの為に

下駄箱に入れる方法も考えたが
その時はこれが最善のように思えた

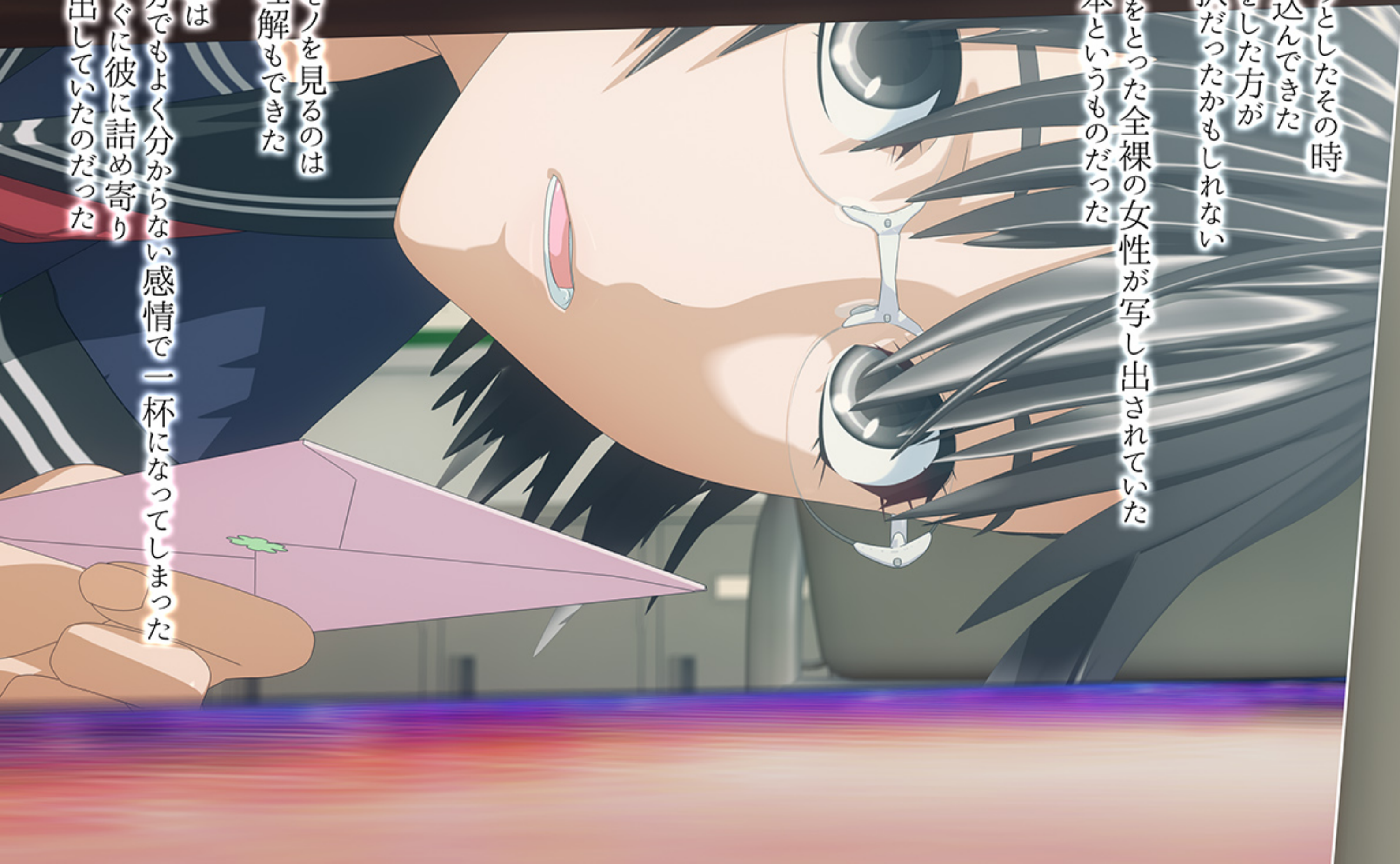
しかしそれが最悪の結果へ繋がるとは思ってもよらなかった……

机の中に手紙を入れようとしたその時
私の目に一冊の本が飛び込んできた
今思えば見て見ぬふりをした方が
自分にとっても幸せな選択だったかもしれない

そこには挑発的なポーズをとった全裸の女性が写し出されていた
そうそれは俗に言うエロ本というものだった

年頃の男の子がこういうモノを見るのは
知識として知っていたし理解もできた

けれどそれを見た瞬間私は
嫉妬なのかなんなのか自分でもよく分からない感情で一杯になってしまった
そして体育が終わるとすぐに彼に詰め寄り
放課後に話があると呼び出していたのだった





こうして私は教室の隅でただ一人
彼が来るのを待っているのだった

結局手紙は渡せず
スカートのポケットに仕舞い込んだままだ

何もかもが思い通りにいかず気分が落ち込んでくる

待ち合わせの時間を
しっかりと決めなかったのも失敗だった

下校時刻が過ぎた校内からは人の気配が消え
どこか寂しさを感じさせる静寂のせい
不安だけが私の心に募っていく

またいつもみたいに喧嘩腰になってしまわないだろうか
そもそもちゃんと来てくれるのだろうか

学級委員長としての責務から彼を呼び出したはずなのに
考えることはそんな心配事ばかりだった





ほどなくして教室のドアが開き彼が姿を現した



櫻井一志君

——私がラブレターを渡すはずだった人
——私の好きな人

彼の顔を見た瞬間

私の心に安堵の気持ち広がっていくのが分かった

約束通り来てくれたというただそれだけで嬉しかった



しかしその喜びもつかの間

彼の気の抜けたようなキョトンとした顔を見た途端
私の中で何かいけないスイッチが入ってしまった





次の瞬間私の口から出てきたのは
彼を叱責するキツイ言葉の数々だった



ああ私はいつもこうだ

もつと普通に会話したいと思っているのに
どうしてもこんな言い方しかできないのだろう

本当に自分が嫌になる

ずっとこんな自分を変えたいと思っているのに
変わることが出来ない 変わるキツカケすらない

そしてこれも痛感する

こんな私がどうして彼に好かれるというのだろうか
ラブレターを渡していい返事が返ってくる理由がない

帰ったら手紙は捨ててしまおう
この気持ちは心の中にずっと仕舞ったままにしておこう

頭の隅でそんなことを考えながら
説教を続けていたその時だった――



「……あそいえばさ手紙ってなんの手紙？」

唐突に発せられた櫻井君のその一言に全てが凍りついた
頭の中に「？」が飛び交い思考が停止する
脳の神経回路が活動を再開するのにざっと数秒は必要だった



「……私そんな事言った？」

「言ったじゃん手紙入れようとしたって」

どうやら説教をしている間に口を滑らせ
手紙のことを喋ってしまったらしい

私は必死に頭をフル回転させ

この窮地を乗り越える為の打開案を模索していった

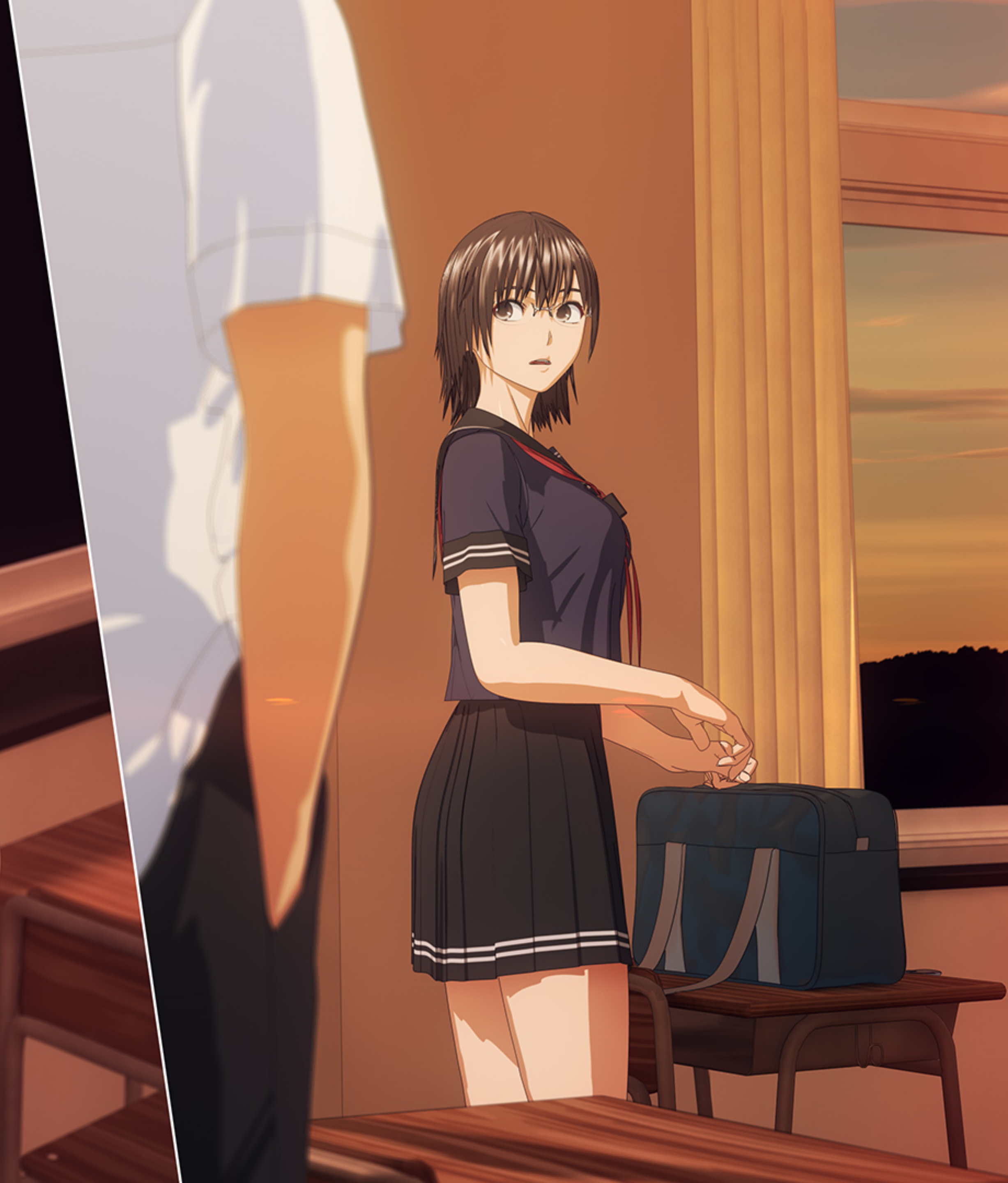
そして最善と思われる答えへと辿り着くと

動揺を悟られぬよう胸を張り声を高らかに宣言した

「果たし状よっ!!」

私はあなたに決闘を申し込もうとしていたのよ!
櫻井君勝負よ!!」

……もう少しだけ熟考すべきだった



「先に足を崩した方の負け シンプルでしょ」

——どうしてこうなってしまったのだろうか？

目の前で正座している櫻井君を睨みつけながら
私は先ほどの出来事に思いを巡らせていた

苦し紛れに言い放った「果たし状」という言葉
自分でも何を言っているのかと驚いてしまった
どこのご時世に手紙で決闘を申し込む女子学生がいるのだろうか？

しかし一度口にしてしまった以上
この馬鹿げた主張を押し通すしかなかった

その場の思い付きで正座対決を提案すると
櫻井君は困惑しながらも受け入れてくれた
こんな無茶なお願いに付き合ってくれる彼に申し訳が立たない
だが今の私にはこうするしか方法がないのだった

とにかくごまかす

たとえ今の私の印象が最悪になろうとも
彼にこの気持ちを知られる訳にはいかない





——いったいどれぐらい経っただろう

時間としてはそれほど長くなかったかも知れないが
自らの脚が限界に近付いてきた頃
ようやく櫻井君が痺れに耐え切れずに床へと倒れ込んだ

それは勝敗が決したことを意味していた

「やったー！ 勝ったー!! 私の勝ちよ!!」

その瞬間 私はつい全身で喜びを爆発させてしまった
勝負に勝てた嬉しさよりも
手紙を隠し通せた安心感の方が大きかったかもしれない

だがそれがまずかった

私も彼と同じく 長時間の正座によって脚が痺れ切っていたせいで
上体を起こしたタイミングでバランスを崩し
横たわる櫻井君の上へと倒れ込んでしまった

その時どこから紙が落ちたような音が聞こえた気もしたが
それが何なのか確かめる余裕は今の私には無かった



「大丈夫？ 委員長？」

気付いた時には
私の目の前に櫻井君の心配そうな顔が広がっていた

瞳の虹彩すらクッキリ見えるほどの距離で
じっと私を見つめている

これほど近くで彼の目を見るのは
あの時以来かも知れない

そう……

私が初めて櫻井君の事を異性として意識した
一年前のあの瞬間と……

私はまるで魔法をかけられたかのように
彼の澄んだ瞳に釘付けになってしまった

櫻井君へ



「だっ……大丈夫よ!」

私はその空気を振り払うように強く言い放つと
慌てて彼の胸から飛び退いた

頬が火を差したように熱を帯び
心臓が恐ろしい程の速さで早鐘を打っている
恥ずかしさで彼の顔を直視することができなかった

もうこれで手紙の事はごまかせただろう……

あとは適当にこの場を切り上げれば良かったのだが
脚が痺れているせいですぐに立ち上がるのは困難だった

今すぐここから逃げ出したい気持ちを抑えながら
脚をマッサージしていると不意に櫻井君が私に訊いてきた







前略、櫻井一花様。
突然このような手紙を受け取って、とても驚かれています事かと思ひます。
私は同じクラスに在籍する女子生徒です。名前はお知らせさせていただきます。
手紙に名前を書かないのは失礼だとお叱りいただいておりますが、
今の私には書く勇気がありませんでした。
何故なら、これから伝えることの結果次第で、
櫻井君と普通に関わる事が出来なくなってしまうのが怖かったからです。

櫻井一花君、私は貴方が好きです。とても好きです。
高校に入學して同じクラスになり、櫻井君と過ごしたこの一年間、
いつからかは自分でも気づかぬうちに櫻井君に恋をしていました。
学校ではいつも貴方の姿をそばで見て、貴方の笑顔を見てから、
勉強する時、お風呂に入る時、寝る時、食事をしている時、
櫻井君の顔ばかりを思い浮かべていました。
何故か自分より劣る感じがして、
日々の私は櫻井君を前にするといつも上手く話さずじまつて、
本当はもっと貴方と話をしたいのに、勇気が出ない自分です。
でも安全ならなんとかなるからこの気持ちを伝える分にはいい、
この想い、受け取ってください。

でも貴方が知りたい事が一つあります。
それは、櫻井君に好きなんだがどうかな、
好きなんだがどうかな、明日の授業、
貴方の黒板の右側に〇を書いてください。
私も好きなんだがどうかな、
もし〇だったなら、この気持ちを返すつもりで、
もしなかったら、貴方を嫌いになって自分、
この気持ちを櫻井君に伝えたいと思ひ、
どうか私に勇気を与えてください。お返事、
貴女

しかし櫻井君はそんな慌てふためく私の様子を
微笑みを浮かべてじっと見つめているままだった

ああ……もうダメだ
彼に私の気持ちバレてしまった
すべてを察し諦めようとしたその時だった

「んじやさ 委員長 その友達に伝えといてくれる？
質問の答え 好きな子がいるかってヤツ」

私の事を気遣ってくれたのか
櫻井君が私の嘘に話を合わせてくれた

思ってもみなかった展開に心が浮足立つ

私が手紙に書いたのは「好きな子がいなければ
私のこの気持ちを直接伝えたい」というものだった
その質問に今この場で答えてくれるというのだ

「ううん わかった…… 伝える」

もしかしたら私にもまだチャンスがあるかも知れない
そんな淡い期待を胸に私は彼の答えを待った

しかし彼の口から出てきたのは
私の恋心を完膚なきまでに打ち砕くものだった

「好きな子はいます」



「どんな子が聞きたい？」
「……聞きたくない」

「俺の好きな子はね……」

「聞きたくないって言うてるぞじゃあ!!」

たとえどんな答えが返ってきても後悔はしないそう心に誓っていた

しかし櫻井君の口からその言葉を聞いた途端
涙がみるみると溢れ出てきてしまった

よく考えれば当たり前のことだ
人は誰だって恋をする
私が櫻井君に恋をしているのと同じように
彼もまた誰かに恋をしているのは当然のことだった
ただその相手が自分ではないというそれだけの事だ

心のどこかではずっと分かっていた
私みたいな女を好きになってくれる人なんて誰もいない事を

もう帰ろう……

帰ってベッドの中で涙が枯れるほど泣けばきつと諦めもつくだろう

そう思い立ち上がろうとしたその時だった――



「俺の好きな子は眼鏡を掛けてて頭良くていつも怒ってるけど笑ったら可愛くて表情がコロコロ変わる目の前で泣いてる子」

「今恋に落ちました」

その言葉を聞いた瞬間の喜びを私はどう表現したらいいのだろうか？

とても言葉に言い表せない
まるで天にも昇るような気持ちとはこの事だった

ずっと好きだった人が
私の事を好きになったと言ってくれたのだ

さつきまで私の心を覆っていた暗い感情は嘘のように消え去り
代わりに例えようないほどの幸福感が満たされていった

そして私たちは自然と引かれ合うように
口づけを交わした……



ずっと夢見ていた好きな人との初めてのキス……

ほんの一瞬唇が触れ合っただけで

鼓動が高まり胸が苦しくなる

しかし決して嫌な苦しさではなかった

いつまでもずっとこうしていたい……
このまま時が止まってしまえばいいのに……
そんな切ない想いが私の心を包み込んでいく

二度目のキスは先ほどよりも刺激的だった

櫻井君の舌が恐る恐るといった具合で私の唞内へと入り込んできた
そのぎこちない動きから
彼もこれが初めてのキスだと容易に察しがついた

それが嬉しくてつい自分からも舌を絡め合わせてしまった
ちよつと大胆だったかも……

互いの唾液を混ぜ合わせながら
舌同士を擦り合わせるように吸い合っていく

映画で見るような大人のキスに
私の頭は次第に何も考えられなくなるほど蕩けていった



——どうしてこうなってしまったのだろうか？

いつの間にか私は剥き出しにされた乳房を櫻井君に弄ばれていた

キスで思考がおぼつかないほどに蕩けてしまっていたせいで
なぜこんな事になっているのか理解が追いつかなかった
それでも肌に触られる快感だけは明確に私の脳へと伝わってきた

彼の指が彼の唇が
私の身体の上を隅々まで這い回る

その度に私の肉体は敏感に反応し
お腹の奥がぼかぼかと温かくなっていた

櫻井君はひとしきり私の乳房を味わうと
意を決したような表情で私を見つめその切実な思いを口にした

「俺委員長にもっと触りたい……委員長の中に入りたい！」

告白したその日に一線を越えてしまうなんて……

頭ではそう分かっているのだけれど

こんな真剣な眼差しの彼を拒絶するなんて私には到底できなかった……



櫻井君に下着を脱がされ机の上に座らされると
促されるまま大きく脚を広げられた
まだ誰にも見せたことのない私の大事な入り口が彼の眼前に晒される

そこはすでにすつかりと濡れそぼり
彼を迎え入れる準備を完了させていた

あまりの恥ずかしさに
どうにかなくなってしまいそうだった

羞恥心に耐え切れず顔を背けるように視線を落とすと
私の目に異様な形をしたナニカが飛び込んできた
それが櫻井君の生殖器であると理解するのに
数秒の時間が必要だった

血管が浮き出るほど赤黒く隆起したソレは
先端から透明な液体を滴らせながらピクピクと蠢いていた



「委員長 挿れるよ……」

櫻井君が私に覆い被さるようにしてそう囁いた
私もそれに答えようと口を開いたが
言葉にならない吐息がただ漏れただけだった

「わ私初めてだから……」

「お俺も初めてだから大丈夫」

初めてを大好きな人に捧げられる喜びと
大好きな人の初めてを貰える嬉しさが
私の中に渦巻く不安を和らげていく

櫻井君は私の性器におちんちんを押し当てると
馴染ませるように上下に擦り合わせた
やがて入り口を探り当てたのか
狙いを定めるかのように先端を静止させた

「……いくよ?」

不安を紛らわせるように彼の手を握りしめると

櫻井君は私を安心させるようにその手をぎゅつと強く握り返してくれた

そして次の瞬間

膣口に押し当てられていたおちんちんがゆつくりと前進を開始した……



何かプツリと千切れる感覚と共に
強烈な痛みが襲い掛かってきた

あまりの激痛に
反射的に身体が仰け反ってしまった

「委員長…… 大丈夫？」

「だ 大丈夫じゃない……」

お願い 動くのちよつと待って」

とてつもなく大きな塊が

体内に這入り込んでいるのがハッキリと分かった

無理やり拡げられた穴がズキズキと痛みを発している

さつきまであればど気持ち良かったのが嘘のようだった

私は深呼吸を繰り返し

彼が一刻も早く行為に没頭できるよう

身体を落ち着かせていった

「……落ち着いた？」

「ふう〜何とか いいわよ動いて」

「いいの？ 大丈夫？ 無理しなくていいけど」

「櫻井君は動きたいんでしょ？」

少しぐらいなら我慢できるから……」

「そそれじゃ……」

櫻井君はそう言うとおもむろに腰を動かし始めた



揺れる視界耳に届く吐息
粘膜から感じられる想い人の温もり
子宮に響く心地良いリズム……

痛みと快楽が絡み合い混濁する意識の中
私はたった今起こっているこの現実
に身体が震えるほど感動していた

ああ……

私は今セックスをしてるんだ
大好きな人と繋がっているんだ……

——ずっと優等生として生きてきた

教師や同級生の期待に応えるべく努力してきた

しかし私も一人の人間だ性欲だってある

櫻井君に抱かれるのを想像して自分を慰めたことも

一度や二度ではなかった

その夢にまで見ていた願いが実際に叶っているのだ

嬉しさと喜びが全身に広がり痛みが快感へと塗り替えられていく
労わるような櫻井君の優しいピストンのおかげもあって
私の肉体は快楽の坩堝へと沈んでいった



「……委員長 俺の事本気で好き？」

「ええ？ どうしたの突然……」

「そういえば委員長の口から
ちゃんと聞いてなかったなって思っ……」

確かに手紙には好きと書いたけれど

まだ自分の口から直接伝えてはいなかった

今さら隠す必要も恥ずかしがる事もない

私は櫻井君に対する想いをそのまま声に出して彼に伝えた

「もちろん……好きよ……
好き♡大好き♡私は櫻井君が大好き……」

自分でも驚くくらい素直に口に出ることが出来た

そして実際に言葉にしてみてもより実感した

私は本当に櫻井君のことが好きなのだ

「俺も好きだよ 委員長」

櫻井君の答えに自然と頬が緩む

互いに好意を伝え合うだけで

どうしてこんなにも幸せな気持ちになれるのだろう

そして彼はこう続けた

「……俺の子供妊娠してくれる？」



「へえええええ〜!？」

あまりに飛躍したお願いに
目が点になってしまった

「嫌？」

「い嫌って訳じゃないけど……そんな急に言われても」

勿論こうして避妊具を付けずに性行為をしている時点で
妊娠の可能性があることは十分承知していた
けれどこう改まって言われると
そのことについて考えざるを得なかった

「だってホラ私たちまだ学生だし!
そりゃいつかは欲しいなって思うけど……
やだ何言ってるの私……」

「委員長……俺このまま中を出すから」

櫻井君はそう宣言すると
さらに激しく腰を打ち付け始めた

それは完全に膣内射精をする為だけの動きだった
欲望に抗うことなくただ純粹に本能だけに従って
精液を私に注ぎ込もうとしている

「駄目駄目っ!
絶対中を出しちゃダメッ!!」

「委員長もし本気で嫌だったら
今すぐ俺の体蹴り飛ばして!!」





もしこのまま膣内で射精されたら
本当に妊娠してしまうかも知れない

それを防ぐには櫻井君の言う通り
彼の身体を蹴って引き剥がすしか方法がないだろう

けれど一生懸命に腰を振っている彼を見ると
そうするには些か抵抗があった

せつかく私の身体で気持ち良くなってくれているのだから
最後の瞬間まで中にいてほしかった

「もっと脚広げて委員長……っ！奥で出すよう!!」

「ダメ……っ精子出しちゃダメ……っ!」

わずかに残った理性を総動員して必死の懇願する
しかし彼の耳に届くことはなかった

いやもはや自分の身体にすら届いてはいなかった

私の両脚は自然と左右に割り開かれ
まるで自ら子宮を差し出すかのように
その入り口を大きく広げていたのだから……



「出る!!」

おちんちんの先が子宮口にぴたりと密着した瞬間
私の奥で熱い何かが迸った
初めて味わう感覚だった
これが射精なのだとは本能で分かった

おちんちんが跳ねるように何度も脈打ち
子宮に向かって執拗に精液を浴びせ掛けてくる
身体中が小刻みに痙攣し手足の先がピンと硬直する

破瓜の痛みなどとうに消え去り
途方もない快感が私の全身を包み込んでいった

「ありがと委員長……
膣内でイクの許してくれて……」
「許してないわよバカ……」

なんとかさう口にするも
私の膣はおちんちんを締め付けたまま
一向に離す気配が無かった

最後の一滴まで搾り取ろうと
射精の律動に合わせて細かく収縮を繰り返している

櫻井君はそんな私の膣を愉しむかのように
ゆっくりと腰を揺すりながら吐精を続けていった





長い射精を終え私の膣からおちんちんが抜き出されると粘り気のある白濁した体液が奥からドロリと溢れ出てきた

これが櫻井君の精液……

実際に目の当たりにして

ようやく私は膣内射精をされたのだと実感した

しかし不思議と妊娠に対する恐怖はなかったむしろ私の心を占めていたのは喜びと満足感だった

彼が私の膣内で射精してくれたこと……私を妊娠させようとしてくれたことが嬉しくてたまらなかったのだ……

「委員長 俺もつと委員長の中に出したい……」
「もうっ 櫻井君つて本当に自分勝手……」

そうは言いつつも

私の中に拒否するという選択肢は無かった

もつと櫻井君に抱かれたい私の身体でもつと彼を気持ち良くさせてあげたい私の心はそんな想いで一杯だったのだから……





「……委員長 気持ち良かった？」
「うん こんなに気持ち良いとは思わなかった……」

いったいどれぐらい時間が経っただろう……
陽はすっかりと沈み 辺りは夜の闇に包まれていた

あれから私たちは
発情した動物のように深く交わり続けた

膣内だけに留まらず 喉の奥にも精液を注がれ
全身で彼のすべてを受け入れた

櫻井君が後ろから私を優しく抱き締めてくれる
それだけで幸せが私の心を満たしていった
彼の愛情が温もりを通してハッキリと伝わってくる

私の初めての人が櫻井君で本当に良かったと
心の底からそう思えた……

「……あ また大きくなってきた」

「ゴメン委員長…… もう一回いい？
委員長の身体 エロ過ぎて全然治まらない……」

「ええ？……あと一回だけだからね？」
「ありがと 委員長」

櫻井君は私にもう一度キスをする
下から突き上げるように再び腰を動かし始めた……

